

中国戦線の思い出の記

福井県 大下泰司

大東亜戦当時の日本男子は、身を御国のためにささげ、働くことをもつとも名誉としていた。

昭和十二年十月に支那事変で名譽の戦死をした兄にっづこうと、昭和十六年四月徴兵検査に合格すると、十七年二月現役兵として鯖江中部六二部隊に入隊した。ただちに北支派遣軍として北支山西省陽泉方三五九七部隊山砲隊に入隊。九四式山砲の砲手として一期、二期のきびしい猛訓練。夜は三、四次兵のあらっばい教育がつづいた。十月にはいると秋期山西肅正作戦に参加。これが最初の作戦参加で、八路军との戦いで、一日十数里の昼夜なき行軍がつづいた。

馬にやる水も部落に一個しかない井戸からあたえたが、井戸端には十数人の兵が並び、遅れた場合は古兵に叱られた。この作戦も一か月ほどでおわり、無事帰隊し

た。

十二月にはいり旅団剣術隊に派遣された。ここは旅団の各部隊から銃剣術の優秀な者を選抜して編成された歩兵一個小隊（三、四十人）の剣術の訓練所で、はじめは平定県の小さな町にいたが、一週間ほどで河底鎮北方の奥地の部落へ移った。ここは陽泉製鉄の原石の出るところだった。

最前線で日中は銃剣術の猛練習、夜になると八路军の襲撃をたびたび受けたが、われさきに走って敵を追い、捕虜としてつかまえることたびたびに及んだ。

十八年四月にはいると北支第一軍が第十八春大行作戦を開始した。これは国府軍との戦いで、現地での戦いは交戦部隊にゆづり、剣術隊は現地を出て旅団長の護衛小隊となった。

毎日昼夜の別なく猛行軍がつづき、河南省林県にはいった。朝九時過ぎても朝食もなく、ようやく先頭が止まったので、各部隊長は、この間に飯ごうをたけと命令。ただちに皆でとりかかったが、火をかけるまもなく、小隊長が「全員ただちに出発だ」と大声でどなった。私は

近くにいたので飯ごうの水を捨てて走った。

隊長は「前の二百高地に突撃」といい「全員軍刀を抜き、背のうはここに置け」といった。私も背のうをおろして着剣し、隊長のあとを走った。本隊は飯ごう炊さんをしていたので少し遅れて到着。足もとに敵弾がブツブツととんできた。その時、友軍機が低く飛んで敵陣地に爆弾を投下してくれた。敵陣地にあがってみると、敵の小銃弾丸が散乱しており、敵はしたの谷間へと逃げた。隊長は自分の銃をとり黒山のようにかたまっている敵を撃った。私は隊長のそばにおいてあった軍刀を持ち、右下方向に人声があるので段々畑を二、三段飛びおりた。そこには敵が五、六人いた。銃を腰にかまえ、背中を手榴弾をとって、投げようとした。私は必死に軍刀で彼らに切りつけた。敵の頭はかたくて割れず、軍刀が折れてしまった。敵が抵抗しなくなつたので引き揚げ、山のうえの隊長のところへもどった。

隊長に「軍刀をおかえしします。敵を切ったとき折れてしまいました」と差しでしたが叱られなかった。それから田中分隊長のところへいくと、皆が必死に弾を撃つ

ていた。先方に逃げた敵が大行山脈の岩山にかくれ、二陣、三陣地から迫撃砲、機関銃を雨あられと撃ち、交戦中であつた。

午後三時ごろ、友軍の援助があつて交戦を終わり、雑のうのカンパンをかんだ。この戦闘で、山の途中で三人陣地で五人の犠牲者がでた。立派な剣士をなくしたのは残念であつた。この作戦も一か月少々で終わり、五月中旬には陽泉に帰り、剣術小隊は解散、原隊に復帰し半年ぶりに戦友とあつた。彼らも大行作戦に参加していた。

二、三日すると中隊当番は「中隊長が呼んでいる」との連絡で、なにか叱られるかと出頭すると、いつも厳格な木村中隊長はニコニコして「大下、椅子に掛けよ。俺は昨日旅団将校集会で大行作戦の反省会にいつてきた。

その反省会で旅団長閣下が石割剣術隊長に、今作戦の二百高地に肉薄占領して活躍してくれたが、その時のことを話せといわれ、石割隊長が山砲隊の大下一等兵が一番に突撃して敵陣にのりこみ肉薄戦をしてくれた。と報告、俺は山砲隊と聞き、嬉しく鼻が高かつた。殊勲者だ」といつてほめてくださった。

それから一か月ほどたつと部隊解散のうわさが流れ、十八年七月発令で、天津第二十七師団に転属する者と、残って歩兵砲となる者にわかれた。歩兵砲は歩兵と一緒に沖繩に行くらしいとのうわさで「沖繩に行く者は結構ではないか、沖繩は内地みたいだ。舟板一枚あれば泳いで帰れるぞ」と言って別れた。これが明暗をわけようとは夢にも思わなかった。

一方、十八年七月大陸の厚い河北省天津に着いた我ら百数人は、極第二十七師団山砲二七連隊となり、私は第五中隊に配属された。この部隊は元支那駐屯部隊で、十二年七月七日の蘆溝橋事件勃発に遭遇した部隊である。天津の日本租界を馬運動で通ると、日本人の奥さんたちは「兵隊さん、ご苦労様です」と言ってお茶を出してくれた。山西の山奥の兵隊とは天地の差があると思っ

た。
第五中隊は北京砲兵訓練所に移動した。一、二週間後、石井中隊長が「俺は明日、唐山の大隊本部にいくから一緒に行くように」と私に言われ、矢吹大隊長と会った。大隊長は武漢作戦の武勳者で、作戦に関心を持たれ、二

ニコニコしているの話をされた。私にも「君は元の部隊で先頭に活躍したとあるがどうか」と問われたが、私は「たいしたことはありません」と答えて話さなかった。それから大隊本部要員となった。

十八年九月にはいると第二十七師団も満州の錦州に移動し、関東軍の隸下にはいる。ここは元十九路軍の兵舎でアツツ島に渡り玉砕した山崎部隊のあとだとのこと。我らも訓練して南方に行つて玉砕だろうとうわさしい、毎日関東軍として猛訓練、猛演習がつづいた。

翌十九年三月十日、待ちに待った動員下令。ただちに出勤せよとのこと、二日後に出発した。夜やみを走る貨車のなかで、「どこを走っているんだろう」と皆ヒソヒソ話しあっていた。二日後に北支であることがわかり、着いたところは北支河南省新郷であった。そこから行軍で焦作に集結、京漢線打通作戦（第一次作戦、河南作戦とも言う）にはいる。

焦作鎮を出発して河南の大平原を進み、大黄河を敵の狙撃を用心しつつ日没に渡河した。大黄河の幅は四、五キロあった。工兵は何百もの舟を横にならべ、民家の戸

板を敷いて仮橋をつくる。我ら山砲隊の駄馬はゆれる橋を「オーラオーラ」の声で渡る。

霸王城の戦闘に続いて鄭州、許昌、潭城の攻略戦があり、私は中村曹長と地雷を頼りに大隊の先頭を行軍した。道路には敵の地雷が多く、石灰を土の新しくなっている個所にまき、『地雷注意』の記をしての行軍である。許昌攻略では、麦畑から敵の伏兵が現われ、ゼロ距離射撃で散弾をあびせた。二日間の行軍後、「前方敵の大部隊あり」との情報はいった。夜間を利用して敵前へ、敵の歩兵は機関銃で応戦。大隊長は歩兵連隊へ連絡をとる、一、二、三大隊が三方を包囲、三十六門の砲列を敷いた。払暁、朝五時、一分三発の連続発射で天地をゆるがす砲兵の総攻撃戦となった。前方の漯河とりではふんさいされ、敵八十九軍はかためつするという大戦果の鄭城戦であった。これで京漢作戦は終わり、南下した。

しかし、中支の長台関（三官廟）で大悲劇に会った。前日からの行軍で、その日は米軍機来襲にそなえて夜行軍となった。雨は嵐となり軍衣は背中までびしょ濡れとなった。午前零時ごろ、雨はますます強く、冷え込んだ。

道もなく、膝まで赤土の泥沼にめり込んでの行軍となった。いままでの疲労と寒気で動けなくなり、多数の凍死者が続出、大惨事となった。この惨事によって師団長は更迭され、落合中将となる。

ようやく漢口に着き夏服に変わった。補給も終わり、大楊子江を渡河して第二次戦。湘桂作戦（湖南作戦）にはいる。ここは水田、山、川などがあり、まるで内地のようであった。長沙近くではじめて米国の空襲を受け悩まされた。食糧の補給がないので現地でもみを徴発、夜間もみすりをしてのみまじった玄米食で下痢患者続出。さらに夜は蚊に悩まされて寝られずマラリア患者も続出した。六、七月の雨期で道はぬかるみ、軍衣も顔も泥だらけの行軍だった。負傷患者、栄養疾患者は野戦病院に送られても名ばかり、病院で薬も食糧もなく、死が待ち受けていた。

ようやく八月中旬、湖南省茶陵にフラフラと到着。ここで人馬の補給があるまで休養することとなった。でも毎日の食糧の徴発、討伐戦のほか、断続的な米軍の空襲もあって、茶陵のまちは崩壊。休む間もなく山里に分

散した。年末のころ、渡河分哨で暖房のため火をたき、敵機の爆撃にあった。明朝、川に魚が浮き、我々は久しぶりに魚を食べた。

翌二十年一月十日、遂贛作戰(第三次作戰)にはいる。遂川、贛州の米軍飛行場攻撃である。中文と南支の境にある江西省の万洋山脈は急峻で千、二千メートル級の山が並んでいる。とくに南支の塩山ごえでは二千メートルの山肌に樹氷の花が咲いていた。

夏服で身にしむ寒さのために、休むと凍死するといって休憩なしで行軍。山岳では道幅がせまく駄馬は砲を積んだまま谷間に落ちることたびたびで、第四中隊は行軍がおくれてしまった。このため敵に包囲され、苦戦する山岳戦となり、ナポレオンのアルプスごえのようだとはいわれた。

遂川に着くと、飛行場にいた敵は逃げ、米軍の捨てた飛行機が二、三台あった。みな石を拾って投げた。師団はさらに贛州飛行場へと猛行軍。支那軍に包囲攻撃をかけ、贛州飛行場も難なく落ちた。

これで北支、中文、南支と大陸を貫通した。さらに兵

団は南下して、広東省、三南作戰(第四次作戰)に移った。ここは南支で物資は豊かで、とくに砂糖は豊富で、どこの家でも砂糖だらけで驚いた。南国で回虫に悩まされたが、菜もなく「センダン」の根の皮を煮て虫下しに使った。六月に広東省惠州にはいった。バイアス湾に米軍の上陸に備えて陣地をつくり待ったが、ソ連の態度の悪化により「北滿急を告ぐ、引き返せ」との命令により北上作戰(第五次作戰)となる。

いままで攻略してきた我々は、飯のうえの蠅のようであった。兵馬も半数にへり、歩兵の中隊は四、五十人しか残っていなかった。砲弾も少なく、歩兵が苦戦して「山砲前へ」がかかっても、集中打もできず、かろうじて射撃で敵を打ちばらい、歩兵を前進させた。八月に入り、中支江西省南昌近くで終戦の報を聞き、ただ驚いて残念の涙を流した。

九月にはいり、江蘇省常州に集結、一年半にわたる苦労の連続で、兵も馬も皆疲れ果てていた。あの広大な大陸を北から南まで歩き、さらにまた引き返す戦闘行軍で、わが軍始まって以来の一万キロ大陸縦断大作戦で

あった。十月に武装解除となり、砲も兵器も長年共に苦
勞した軍馬も中国軍に渡し、一部のもは中国兵に砲、
馬の使い方を教えに行った。また、中国の上級幹部は、
わが落合師団長を「教官」と呼んだ。

師団長も我々に「お前たちは長年非常に苦勞をしてく
れたので、支那派遣軍中一番先に帰す」と言われ、二十
一年三月に常州を出発、三月下旬に上海より乗船、復員
した。

北支陽泉で別れ、沖繩戦で玉碎した戦友、あるいは大
陸打通作戦で多くの戦友、犠牲者、戦死公報を受け取り、
悲しい涙を流されたご両親を思い浮かべるとき、目頭が
熱くなる。果つべき命を長らえて帰ってきた我々は、な
き戦友のご冥福を祈るのみである。